

## 第5章 小学校の訪問調査結果

それでは、この章から学校訪問調査で明らかになった各学校の学習指導の特色を順に述べていきたい。

### (1) A 市立 A 小学校

#### 1 学校の概要

学校規模は、児童数は 1,066 名、学級数は 35 学級である。学校の歴史（授業改善と学力向上について）は、平成 4 年に分離開校、平成 16 年に市教育委員会「魅力ある教育実践推進校園」研究指定を受け、実践研究をした。研究主題は、「確かな力をもって、学び続ける子どもの育成—子どもの心にひびき、心をゆさぶる授業をめざして—」である。

地域性は、近年開発された新興住宅地が中心的な郊外地域であり、近郊に複数の大学があつて県外からの転居者が多い。大学・図書館・美術館等のある文化学園都市近郊住宅地であり、教育に対する関心が極めて高い。

#### 2 授業づくりの特徴

学校を一巡し授業を参観したが、話し合い、一斉学習、グループと教科等により様々であったが、教員の創意工夫された指導方法としての板書やプリント、ICT の活用等よりは、児童がしっかりとノートをとっていることが最大の特徴であった。低学年では規律よく、高学年では確実に意見の捉えと振り返りが見え、質的に高い児童の学びが随所に見られた。

また、本校の授業づくりの特徴は、全国学力・学習状況調査の分析に基づいた授業づくりの焦点化といえる。本校では、学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく読む問題、故事成語の意味と使い方を理解する問題（故事成語の使い方として適切なものを選択する。）、立場を明確にして質問や意見を述べる問題、分かったことや疑問に思ったことを整理しそれらに関係付けながらまとめて書く問題、詩の解釈における着眼点の違いを捉える問題、示された情報を基に条件に合う時間を求めることが出来るかという問題、示された情報を基に必要な量と残りの量の大小を判断しその理由を記述出来るかという問題、示された情報を整理し筋道を立てて考え小数倍の長さの求め方を記述できるかという問題等々の課題を明確にし、それぞれを単元レベルで授業に取り入れようとしている。

また、経年比較から、算数の授業の内容はよく分かりますか（+9.9）、国語の授業で文章を読むとき段落や話のまとめりとともに内容を理解しながら読んでいますか（+9.7）、毎日同じくらいの時刻に寝ていますか（+9.6）、人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか（+9.4）、国語の勉強は好きですか（+9.1）、朝食を毎日食べていますか（+9.0）、国語の授業の内容はよく分かりますか（+8.0）、人の役に立つ人間になりたいと思いますか（+5.4）というような強みと、▲読書は好きですか（-4.9）、▲友達と話し合うとき友達の話や意見を最後まで聞くことができますか（-4.6）、▲算数の授業で問題

を解くときもっと簡単に解く方法がないか考えますか (-3.9)、▲5年生までに受けた授業では本やインターネットを使ってグループで調べる活動をよく行っていたと思いますか (-3.8) というような弱みを分析し、その上で、下記の要点を明確に示している。

すなわち、授業のねらいの意識化(板書・提示)と振り返りの重視、学び合いの場面(話し合い活動)を大切にした授業の重視、規範意識の一層の醸成、算数学習への一層の意欲付けを図る授業の工夫、授業と関連した家庭学習の徹底である。

### 3 特色ある取組

全校レベルの取組では、①「わかる・できる授業」づくり、②「心の教育」推進、③「開かれた学校」づくり、④「健康と安全」を守る取組みを進め、教育課程全体で子どもを育てようとしている。教科指導では、「学び合い」に重点化した指導を実施している。総合的な学習の時間・道徳・特別活動では、平成23年度まで道徳と関連させた教科学習の研究を進めていた。家庭学習の在り方・保護者連携では、家庭学習を国語、算数、自由学習で実施して効果を上げている。また、低学力層の底上げ・無解答の減少では、算数での少人数指導での授業を実施し、効果を上げている。

その他の特色ある取組では、地域に学ぶ(5年生での米作りを、総合的な学習の時間で実施)によって、探究的な学習が行われている。なお、児童の意欲・関心の向上の面では、自尊心が強く、最後まであきらめない子どもが多い点を添えておきたい。

### 4 総括的考察

学校長の話でも、①言葉が豊富であり、本に触れる子どもが非常に多い。保護者が、本を読んで聞かせている、②1年生が「ざじずぜぞ」に続く言葉の学習で、「ざじずぜ造形が美しい」という言葉を発表できるのには驚いた等、子どもの姿が素晴らしい、③学校図書の利用状況が少なかったが、アンケートを取ったら、すでに家庭に辞書や事典、本が揃っており、改めて学校から本を借りる必要がないという結果であった。家庭の教育力レベルの影響が伺える。

なお、生徒指導・学級経営では、問題状況が多発しており、対応に苦慮する状況であること。地域との連携では、地域が複雑で協力を得るのが難しいが保護者を中心に連携を続けていること。小中連携では、1小1中であるにもかかわらず、中学校からの出前授業しか実施できていない等、課題も見受けられる。

## (2) B 市立 B 小学校

### 1 学校の概要

当校の教職員数は 27 名、全校児童数 464 名（19 学級）である。都市部の比較的中心に近い位置に立地し、官公庁や大学も近隣にあり、校区内には官公庁関連の住宅が点在する他、閑静な高級住宅地も広がっている。そのため、家庭環境が安定している子どもたちが多数を占めているという。過去においては同小学校を卒業し、同小校区を含む中学校を卒業し、地域の進学高校に入り、大学に進学するというのが地域のスターテスであり、地域から「特別な学校」という意味の独特の呼称をもっていた学校だったという。

ただし、近年、地域環境や家庭環境も変容し、就学援助を必要とするような厳しい家庭環境の子どもたちも増えてきており、経済的にも学力的にも二極化傾向を示しつつあるという。この現状について、「全国学力調査結果は、現時点では一定の成果を示しているものの、我々は、むしろ学習状況調査の方に強い関心をもっており、そこから二極化改善の方策を見いだす必要性を感じている」と、今年度、異動してきた学校長は話す。

ちなみに、同自治体の全国学力調査結果において良好な結果を示している小学校は、いずれも比較的閑静な住宅街に位置する学校となっている。そのため、地域環境が良好で、その環境によって一定程度学力が支えられていることが予想される同校を、調査対象から外すことは難しかった。さらに言えば、他の都道府県の場合と比較し、同自治体では飛び抜けて良好な結果を残している学校がないのも特徴と言える（この調査で取り上げた他の学校に比して、標準偏差が比較的小さい）。

同校の研究主題は、「わかりやすく、だれもが表現したくなる授業を目ざして」である。前任学校長の時代から、特別支援教育（特別支援学級 3 学級）に力を入れてきており、通常学級においても特別支援教育の視点を取り入れた、授業のユニバーサルデザインの実践に力を入れてきているところである。

現任の学校長は、自身が指導主事時代に特別支援教育にも関わっていたこともあり、前任者からの基本姿勢を引き継ぐとともに、さらに実践を深めていっている過程だという。研究主題に迫るために、今年度は「わかりやすい授業づくり」を全校の研修テーマに掲げており、「わかりやすい授業」を実現するための、さまざまな場の設定、手だてを工夫することを、学校の教職員全体がしっかりと共有している。授業づくりにおいては、例えば、板書に画像や表組等をより多く取り入れ、視覚的に分かりやすくする改善を行ったり、学習中も隣同士のペアによる情報の共有（話し合い・伝え合い）を取り入れたたりして、教員の言葉による情報提供だけでは学習が定着し難い子どもに対しても、より学習が定着しやすくなるような授業改善を図っているところであるという。

### 2 授業づくりの特徴

同校では、1 年生の国語（1 時間）、2 年の国語・算数（1 時間）の授業観察を行った。

前節でも紹介の通り、同校の特徴は、特別支援教育の考え方を取り入れた、ユニバーサルデザインの授業づくりに力を入れているところである（特別な研究団体に所属しているわけではない）。40 代の教

論が多く、その世代が研究の中心になりながら、多様な専門書を読み、独自に教室内の環境改善を含め、視覚化（画像や表等を活用した板書の整理）、共有化（ペアトークやグループ学習の意図的・計画的導入）といった、授業改善を図っている過程である。

1年生の授業は、「ことばのなかまあつめ」に関する学習であった。同授業では、前時の学習内容を表組にして視覚的に整理。どの子にも分かりやすいように整理して示した言葉が、それぞれ「くだもの」「やさい」「さかな」のなかまであり、それらはまた、さらに上位の概念である「たべもの」の仲間であることを、子どもたちから引き出しながら再確認をしていく。

そこから、本時の中心的な活動、「なかまあつめゲーム」として、「がっき」の仲間の言葉を集めていくのだが、その時に、前時までの学習活動を通して探してきた「すきなことば」を使って、ビンゴゲームを行うことを知らせ、意欲を高めている。これによって、通常では独力での学習を持続できにくい支援の必要な子どもも、この後の自力解決の場面で、何とか言葉を探そうとしていた。その後、選んだ言葉をビンゴゲームの枠に書き込む場面では、悩んで時間がかかってしまう子たちのために、タイマーを示して時間を提示。時間上のめあてをもって、学習を進められるようにしていた。ビンゴゲームという形式をとった学習活動は、子どもたちには非常に好評で、もう一度、ゲームをやりたいと言いだすことによって、再度、言葉集めを行うことになり、主体的に語彙を増やす学習活動へとつながっていた。

そこから、学習をまとめていくために、学んだことを文章化していくのだが、独力では文章にできない子のために、「わたしのすきな（ ）は、（ ）です」という、白抜きの文章を示すことによって、文章化を支援。さらに、要所要所で隣同士のペア学習を入れ、互いに伝え合う場を設定することで、どの子にも、確実に「表現する」場を保障していた。

次時に、2年生の算数と国語を移動しながら参観した。まず、算数の授業は、「三角形」の学習だった。この日は、単元の導入部分であり、4種の長さの違うストローを使って、子どもたちが多様な三角形をつくってみる学習を行っていた。具体物を使った算数的活動を行いながら、その後の学習に向けた興味・関心も高めていくねらいがある。この時に、いわゆる「授業のユニバーサルデザイン」の工夫として取り入れられていたのは、グループ学習とストローの色分けである。

まず、3～4人のグループ学習を行うことによって、発達障害のある児童やスローラーナーでも、友達のアドバイスを受けながら、実際に自力で、三角形をつくってみる算数的活動を行うことができていた。また、その際のストローも、長さごとに、青、赤、緑、黄の4色に色分けがされており、辺の長さの異同を視覚的に捉えられるように工夫されていた。

同時の後半では、2年生の「はんたいのいみのことば」の学習を行っていたが、ここでも1年の学習同様、ペアによる伝え合い（共有化）で学習内容を、一定程度に揃えている。また、まとめたことを書き、表現する場面でも、まずペアでの学習を取り入れて、すべての子に表現する場を与えていた。

### 3 特色ある取組

ここまで何度も触れてきたが、特別支援教育の視点を入れた、授業のユニバーサルデザインについては、全校で統一して取り組んでいる。先に記した通り、授業においては、視覚化と共有化が徹底して図

られていることが容易に見てとれた。

授業づくり以外でも、例えば、教室環境の整備について、全学年・学級とも徹底して実践をしており、まず、黒板と同壁面（前面）の掲示類は極力控えることが統一して行われていた。また、掲示類についても、全学年・学級で基本的なルールを統一。例えば、教室側壁面には学習の要点を整理した掲示を行い、後部壁面に子どもたちの学習成果物の掲示を行っている。これによって、認知や社会性等に課題のある子どもも、黒板を見る時には他の情報が入らず集中を乱される危険性が少なくなる。加えて、自力解決の時には側壁面を見れば学習のヒントとなる情報を得ることができるため、学習に課題のある子どもも自力解決のヒントを自ら見つけることができる。さらに、業間等の時間には、後部壁面の掲示を通して友達の学習成果物から学習の仕方についてのヒントを得られるようにしている。

また、同校では、加配教員が（学校長の裁量で）困り感のある子どもたちの取り出し指導等のために活躍。特別支援教育の対象者やスローラーナー等の子どもたちの支援を行うと同時に、算数における少人数指導実施のための要員ともなっており、個に応じた指導をきめ細かに行っていくことに寄与している。

保護者や地域の学校を支援する意識は高く、多くの保護者や地域住民が図書館ボランティアとして来校している。その取り組みの一貫で、月4回、お話会（読み聞かせ）を行っており、保護者ボランティアだけでなく、保護者OB、高齢者も参加・協力している。そのため、非常に読書活動が盛んで、2年前までは読書活動で、PTA 会長賞、多読書賞等を出していたという。ただし、子どもたちがその受賞を目的に、冊数だけを競ったり、中には冊数をごまかすケースが出たために、現在では賞を出すことをやめている。

しかし、PTA の理解が高く、現在でも「家読」を大切にしており、家読カードを作って、親子で読んでカードに記していく取り組みをしている。

#### 4 総括的考察

地域の中心校という位置づけの学校であり、地域・保護者の教育力に支えられている学力という部分は少なくないと感じられ、これは、学校長自身も認めるところでもある。

その中で、現在は特別支援教育の視点を入れた授業のユニバーサルデザインを中心とする、授業改善に力を入れている過程であり、それはより多くの子どもの学力を保証している一因とも考えられる。実際に、板書等の視覚化と共有化（要所でのペアトークやグループ学習の導入）が、全校で徹底して行われており、課題を抱えた子どもたちの学力の底上げに寄与していることは間違いないであろう。これが、地域性の変容（学力の二極化）に対応するためのひとつの策であり、実際に学力の底上げを図る上で一定の寄与をしていると考えられる。

ちなみに、学校長は、地域に育ち、地域を支えるバランスのよい社会人を育てたいと考えており、「学力・体力・人間力の中でも『人間力』の部分育てたいと考えている。この子たちが、社会を引っ張って行く時に、学力だけでなく、人間力の高い人になってほしい。そのための基礎をつくりたいと思っている」と話す。その実現のため、「何かに過剰に特化した教育を進めるのではなく、バランスの良い学校

改善をしていきたい」という。そうした方針のもと、二極化しつつある子どもたちの学力を、どう支えて行けば良いか、全国学力・学習状況調査の、学習状況調査に重点を置いた分析、改善策の検討を進め、さらなる具体策を考えている過程だという。

いずれにせよ、現時点で、同校の学力を支えているのは、ひとつには地域・保護者の教育力があるが、もう一方で、同校独自の特別支援教育の視点を入れた、どの子にも分かりやすい授業づくり（授業のユニバーサルデザイン）ということができると思う。

### (3) C 市立 C 小学校

#### 1 概要

当校は市街からもある程度離れており、学校の周囲は一戸建ての住宅地が点在することに加え、畑が広がるのどかな地域である。外国人を受け入れている大農家や個人農家が多く、また、学校周辺地域一体はT市の計画に基づいて宅地開発ができないこともあり、流入者があまりおらず、昔から当地にいる人々によって文化が形成されている地域でもある。集金滞納はゼロということからも、経済的な状況は良いと考えられる。

#### 2 全校レベルでの特色ある取り組み

6年間の体系化された食農教育が行われている。これは、6年間を通した栽培体験をはじめとする多様な体験活動を通して地域の人々や仲間とのかかわり、食への感謝、食文化の継承といった「豊かな人間性」を育むとともに、栄養知識、食品選択、食技能といった「食の自立」を目指した教育である。そのため、食農教育を核として生活科、総合的な学習の時間、学級活動が実施されるだけでなく、各教科や給食指導、栄養指導、保健年間計画とも関連性を持たせる工夫をしている。

#### 3 教科指導

授業を参観して感じた特徴として、1人の児童に関わる教員の多さと徹底した個へのアプローチの実現である。算数の授業は1年生から6年生まで週2回TTで行われる(写真1)。また、参観授業のどの授業においても、教員が机間指導を行い、児童と近い距離で声をかけている姿があった(写真2、3)。学校独自の漢字や計算のテストで児童一人ひとりの学習状況を把握し、その結果を教員が共有することで授業、補習、宿題などの指導に確実に結びつけている。

#### 4 生徒指導

生徒指導上の課題が大きい児童はいないが、できる限り予防的な対応に努めている。また、「欠席ゼロ・不登校ゼロ・残食ゼロ」をスローガンに指導にあたっている(写真4)。健康チェック週間では、養護教諭と連携して、「早寝、早起き、朝ごはん、歯磨き、外遊び」といった項目をチェックして、将来への影響を本人へ伝え、保護者にも徹底して連絡するようにしている。授業の様子をみると、私語がほとんどなく、相手のことを大切にされたコミュニケーションができています。また、地域の方々と接する機会が多く、挨拶がしっかりなされている。特に子どもと教員の距離、保護者と教員の距離が近い印象を受けた。

#### 5 家庭学習の在り方・保護者連携

「宿題の量が多い」というわけではないが、「きちんとやらせる」ことにこだわっている。宿題をやつて来ないと、職員室で話題にあがる。また、宿題をやっていない場合は、必ず家庭に電話や連絡帳を使

って連絡を入れ、宿題をやらないことの弊害などを伝えるようにしている。他にも、学校独自のテストなどで学習状況を定期的にチェックし、個々の児童の学習状況を把握したうえで、学級全体に出す宿題だけでなく、個別で宿題を出す場合もある。児童のちょっとした相談から卒業した子どもの相談に至るまで何でも学校に相談する協力関係が築かれている。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

## 6 地域との連携

食農教育として、校区の農家に協力を募り、田んぼや畑を貸してもらっている。また、農園協力隊を組織し、栽培への助言や授業への参加などを行っており、学校に地域の人が来ない日はないほど、地域と連携した学校運営がなされている。また、感謝の会などを通して、栽培した作物をふるまう機会を設けたり、運動会や収穫祭などにも地域の人を巻き込んだりして運動会なども地域の人を巻き込んで行われる。そのような関わりを通して、地域からも家庭と同様、どんなに小さいことでも連絡が入る体制・習慣が出来ている。例えば、「(児童が作物を栽培している) 畑で草がいっぱいだけど、草抜きやっておくか」というものや「ジャンボタニシを知っているか。授業で捕りに来るか」といった食農に関するものから、近隣の子ども教室(児童クラブ)から、「この子の消しゴムがなくなっている」、「この子すごく今日がんばった」といった児童の情報に関するものなどが常に学校に情報として寄せられる。

このように、地域と学校との間により循環が出来ている。そのため、それを教員が共有して日々の指導に生かしたり、さらには家庭にも連絡したりすることで関係を密にすることに成功している。

## 7 小中連携

小中の連携は中学校を中心に小中連携推進委員会を立ち上げており、年3回児童が中学生と触れ合う機会を持っている。また、教育委員会の方針で小中の人事が一緒であり、小学校を経験した後は中学校に赴任、中学校を経験した後は小学校に赴任というように、必ずではないものの多くの教員が小中学校を経験する体制ができています。

## 8 低学力層の底上げ、無解答の減少

無解答の減少については、テストに向けて特別に何かしたわけではないが、日常の学習の中で、わからないところでもしっかり考える、諦めないことを伝えているという。

低学力層の底上げについては、低学力層が形成される前に個々の支援をしている。担当者いわく、「がんばって、できるまでやる」との方針で学習指導に当たっている。毎月行う学校独自のテストの推移を教務が確認し、比較して点数が低下している児童一人一人に対する指導体制の確認やサポートを行う。また、課題のある児童は30分放課と20分昼放課の休み時間に補習を行なっている。放課後や土曜日を利用した補習は行なっていない。

## 9 児童生徒の意欲・関心の向上

児童数が少ないので、意欲の向上というよりも、一人一人が自分の役割をやらざるを得ない、責任感が刷り込まれるように、他人に任せることが許されない空気になっている。「一人一人が責任をもってやらなきゃいけない」ということが意欲につながっている。

## 10 教員研修

校内研修では、春や秋に食農教育を進めるために全教員が「畑のつくり方、土のつくり方、苗の植え方、育て方」を学び、夏や冬には、「野菜の調理の仕方、調理器具の使い方」を身につける。そのため教員の凝集性が高く、時間を決めたフォーマルな研修は多くないが、相談という形での教員間の様々なやりとりや学び合いは数えきれないほどである。例えば、各学級の掲示物について学校としての一定の方針は示すものの、どの学級にも正面には学級目標と児童の顔写真と似顔絵、後ろには食農教育の体験の1年間を表す作品や写真などの掲示がところせましと並んでいる。これは、掲示物について知恵を出し合い、相談を重ねていくうちに似たものになるというが、もはや食農教育が学校の風土として根付いていると言ってよいほどである（写真5、6）。

## 11 その他の特色ある取り組み

少人数を生かした縦割り班（校友グループ）活動も取り組んでいる。年の上の子が下の子の面倒をみ

る、一緒に遊ぶといった活動を通して思いやりや責任感、達成感を味わい、心豊かな人間性を育むことにつながっている。また、朝の元気タイムとして、6種目（登り棒やアスレチックなど）をサーキット方式で体を動かす時間を確保している。また、朝のスピーチタイムでは、1人の児童がテーマを決めて話をする機会を取り、まわりの児童が質問をするといった取り組みが行われている（写真7）。



写真5



写真6

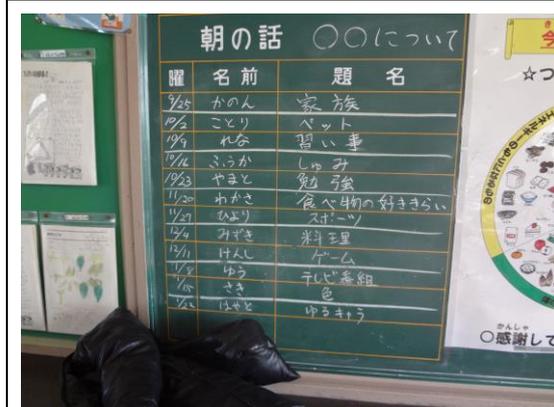


写真7

## 12 総括的考察

地域と学校の関係性が強く、また教員同士が学校の取り組みを持続させていくために徹底した校内研修、相互のサポートを行ない、学校独自の「食農教育」を大成させている。それが学力の向上と直接関係あるとは言い切れるわけではないが、学力テストでは測れない、子どもたちの心の育成に大きく寄与しているのは間違いないだろう。

テストの結果やその推移から低学力層を形成する前に個々へのサポートを入れること、算数の授業での週2回のTTの実施など充実した学習環境づくりをしており、児童数が少ない特徴を有効に活用している。

各学級はそれぞれに目立つ特徴がないものの、全校で統一した掲示物の配置、食農教育の推進が徹底

されており、クラス内の景観が同質化され、維持されている。それは学校としての姿勢にまとまりがある、一貫性がある、という肯定的な見方ができる。

#### (4) D 村立 D 小学校

##### 1 学校の概要

この学校の児童数は100名、通常学級6、特別支援学級2（特別学級児童は4名）である。周辺は酪農地域が点在するが、働くときは近隣の市まで出かける家庭もある。教育に対しては関心が非常に高い。

現在は、伝え学び合う場を大切にした授業づくりをしているが、その始まりは平成17年に文部科学省の「学力向上拠点形成事業研究指定校」である。その事業の中心となり、そこで行なった取り組みを大切に続けながら、今に至っている。学区では、これまでの全国学力・学習状況調査の調査結果を通して、基礎・基本の定着、学習習慣の確立、生活習慣・生活リズムの確立、読書活動の充実などが本地域の課題であることが明らかになったことから、これらの課題解決に向け取り組んでいる。学校においては、子どもが日々の授業で分かるできる授業づくりを目指した教員研修の充実や、家庭における望ましい生活習慣や学習習慣の確立、授業改善の取組などを進めてきた。一人の学級担任が孤軍奮闘し、その学級の学力が向上したとしても、その学級は年度が変われば上の学年や学校に移っていくため、一人一人の子どもに確実にしかも継続して学力が身についていくとはいえない。したがって、学校全体として持続可能で確固たる学習指導のシステムを構築していく必要があると考えている。

##### 2 授業づくりの特徴

教科指導においては、自分の意見を持ち、そこから人の意見を聞いて、さらに自分の意見を高めていくという、児童同士が学び合う学びをすすめている。委員会や行事などの企画は、児童が主体的に計画し、教員はそれがうまく流れるようにサポートをしている。

児童の学習状況の推移は民間の学力調査を活用して数値測定しており、その結果を個人に落とし込み、個人懇談で用いている。それらは学級ごとにファイリングされて、いつでも教員が参照できる環境を作っている。加えて、学級ごとにアシストシートの作成もしている。アンダーアチーバーの生徒に対しては、校内特別支援委員会で具体的な手立てを計画し、担任だけでなく、組織的な対応をとっている。

上からの押しつけではなく、先生同士でこれをやろう、あれをやろうという意欲がうまく繋がっている。日常の中で自身の取り組みの紹介や児童の様子などを話し合うネットワークが形成されている。新しい先生も取り込んでうまく機能している。例えば、6年生の算数の授業。全国の平均正答率が1割程度の問題に挑戦。まず、問題文を読み、答えはどの程度の数値になりそうか、どんな計算を使えば解けそうか等、見通し（気付き）を吹き出しで書かせる。次に、その見通しを全体で交流し説明させる。説明が難しい内容については、隣同士等で互いに話し合わせる。全体に一定の見通しがもてた後で、自力解決を図り、多様な解法について、学級全体で交流を図る等の教育方法が一つの特徴である。

なによりも、全校レベルの取り組みが組織として行われている。伝え、学び合う場を大切にしたい授業づくりが、学校教育の大きな軸として形成されている。これは、思考ツールを取り入れたグループ交流を行ない、思考の可視化・明瞭化を重視しており、また、児童同士の交流場をすすめて、学年間での学び合いを行なっている。思考ツールはもとより、ふきだし法や、ワールドカフェ、メタ認知など、子どもが思考する方法を身につけさせるための多様な手だてを、そのままの名称で教え、実際に活用できるようにさせている。

校内研修では、PDCA サイクルが意識され、数値化による具体的な目標設定をしている。また、全学級の公開授業が定着しており、校内研修、村研、公開研究会など人に見せる授業は複数回に及んでいる。流れとしては「複数回の事前研修⇒公開授業⇒事後研修⇒評価表記入⇒評価表をもとにした研修」という形である。以前は、研究主任主導だったが、昨年度からは全体で積極的に話し合う形ができてきたという。校内研修の方法はグループで行い、授業者と参観者のやりとりが行なわれる。つまり、日常の授業においても研修においても話し合う活動が行なわれているのである。

何よりの特徴は、子どもたちの間で互いの意見に対して学び合う実践をしていることである。教科指導だけでなく、道徳や総合的な学習の時間に全体的に組織として取り組み、単なる習得の学力を高めるだけではなく、子どもの自立（自律）を意識して取り組みをしている。また、1回の授業や単元などで見通しを持たせる授業を研究の中に位置づけて意識させている。そして、先生達が授業づくりを楽しく行なっているということだった。学校長が赴任した際、本校の春休みの課題の量が膨大で驚いたが、それを組みこませる家庭もしっかりしており、何より先生が児童をしっかり鍛えていると感じた。

### 3 特色ある取り組み

家庭を巻き込んだ学習習慣の定着化を図っており、学習時間のめやす、生活リズムチェックシート、読書活動などさまざま啓発を行なっている。年度当初のPTA総会では学校長から、家庭で何を、どのように協力していただくかについてポイントをしばって明確に伝えている。実際にさまざまな考え方ができる例題（例えば算数の問題）を示しながら、学校の方針を認識してもらっている。また、保護者の学校教育への関心は高く、総会の出席率や参観の割合も高い。学期ごとに1家庭1つの決まりづくりを保護者と児童で行い、終わったあとは感想や評価コメントを記入してもらっている。コメントは必ず書いてくれる家庭が多いとのこと。また、生活リズムチェックシートは、学期に1回、参観日のある週に取り組んで、それを材料として、参観日に話をしている。終わったあとには教員全体で回覧して、コメントを書き添えて、返却している。教員が発行する学級通信は、年間100枚近く、または200枚近い数を発行しているケースがある。

### 4 総括的考察

第一は、なんといっても「学び合う学び」である。お互いにかかわり合い、学びを広げる、深める子どもの育成というテーマが、全校に浸透し実践化されている。「伝え合い、学び合う」場を大切にしたい

授業づくりを長年大切にしている。少なくとも10年は継続しており、授業実践の根底にある。また、沿革にもあるように研究面でも多くの業績を残してきているが、その業績をそのときで終わらず、次の世代に確実に引き継いできている。近年では、「思考ツール」を取り入れたグループ交流・全体交流を重視している。思考ツールは、3年間の校内研修で築き上げた思考と交流のアイテムであり、これからの日本の教育の柱のひとつになるのではと考えている。児童も教員も磨き上げる交流学习が重要視されている。授業の流れと同じように、校内研修の中でも「学び合う学び」の流れを生かしている。例えば、授業で発信された「ワールドカフェ方式」が研修の場でも行われている。つまり、子どもと共に教員も「学び合う学び」を実践している。また、6年生の道徳の授業を5年生児童が見学するなど、学年間の学び合いが行われていたり、校内授業研究の内容を他学年で模擬授業をしたりしている。このことが先生方の実践力を育てている。

第二に、「PDCA サイクル」を重視し、確実に実施している。学校評価、校内分掌、校内研修、児童会活動等において、様々の学校生活でPDCA サイクルが意識されている。数値化による具体的な目標を設定している。評価における厳しい意見（チェック）もしっかり受け止め、改善（アクション）へ結びつけている。運動会や学芸発表会の総練習が終わると、自然と他の学年の児童からの感想が届けられている。このことは、少なからず各学年のモチベーションの高まり、学校全体の連帯感につながっている。

第三には、教科の学習のみならず、「創意」あふれる学芸会や委員会活動によって、児童に主体的・自主的活動の場をしっかりと保障していることである。そこでは、「創意」をキーワードに、各学年がテーマに沿ったメッセージ性のある学芸発表を行っている。同時に日常の学習活動が見える発表と見ている人々に伝え感動させることを心がけている。また、一人一人の出番や役割を明確にしている。オンリーワンの意識での創意として、例えば「家族愛」「友情」「感謝」をテーマにした演劇の創意もあれば、「D村の水戸黄門」「じゅげむ：自分の名前と親の思い」「津波てんでんこ」、そして伝統の「ソーラン」もある。先生方のバイタリティーとあふれるアイデア、そして子どもたちへの思いと願いが素晴らしい。また、児童の代表委員会が各委員会の活動を調整し、各委員会が主体的かつ独創的な活動を企画し、運営している。その際、ネーミングなどを工夫し、児童が興味関心を持って取り組むことができるように工夫している。

第四は、「家庭の協力と充実したPTA活動」である。学習習慣の定着や生活リズムの定着は、家庭の協力なしには考えられないとして、家庭を巻き込んだ取組を意図的に行っている。基礎学力を保障する学校全体の取組であるD小学校学校改善プランを策定し、児童の実態について客観的な検査データなどから把握し、学校の経営方針や村の教育目標などを指すための課題を明確にするなどを行っている。

第五に、地域の学力調査等の活用も挙げられる。教務部で印刷、各学級担任に配付、実施を行っている。実施後学級担任が採点（場合によっては教務部が採点）し、状況を把握。各学級担任と結果について確認して授業改善に生かせるところはないか教務主任と打合せを行う。過去の問題から授業で使える問題をピックアップするなどして活用している。「義務教育指導班だより」を回覧、掲示し6年

生以外の先生方にも掲示して意識付けを図った。今年度「学力向上八策」について、全体に説明し、本校の実態からどれを選択するか協議し決めていった。

第六に、朝学習漢字テスト、朝学習計算テストの活用である。朝学習の時間（8：20～8：30）を活用して実施している。問題は、教務部が作成、配付している。漢字テストと計算テストは、それぞれ各学期、連続3日間ずつ実施。教務部が結果を集約し、分析を行い、全教職員に回覧した後担任にもどし、授業改善などに役立てている。「8割以上定着した児童を漢字では85%、計算では95%以上にする。」という数値目標を設定し、目標達成のための計画、見取りの場面、具体的な改善策に則り実践している。

## (5) E 市立 E 小学校

### 1 学校の概要

当校は、平成 26 年度は、教職員数 24 名、児童数 282 名、14 学級（特別支援学級 2 を含む）の規模である。昭和の時代は、複式学級を抱えるほどの小規模校であったが、ある政令市のベッドタウンとなり、一時は 1,200 人近くの児童を抱える規模となった。その後、同校から、2 つの学校が分離独立し、その結果、ここ十年の間は、同校の児童数は 200 人台となっている（この学校が位置する地域の学校の中では、やや小規模である）。

同校の研究主題は「意欲的に学び合う授業の創造」（5 年目を迎える）である。それは、同校の研究紀要に依れば、「本校の子どもは、学校評価や学力テストなどの結果から、学習内容は概ね理解しているが、発表意欲などの面では十分に力が発揮されていない」という児童の実態に関する理解に基づくものだ。なお、研究副主題は「探究心をもち、自分の考えを表現し合う国語科授業」である。

同校が定めている研究仮説は、「教員が明確な目的意識をもたせることで、子どもは見通しをもった追求をする。その過程に、他とのかかわりを生む場を保障することで、自らの考えを表現し合う力が育ち、次の学習や生活に生かしていくことができる」である。それに迫るために、1) 単元を貫く言語活動を軸に、2) 自分と友だちとの考えを比べながら、という手立てをこの学校の教員たちは構想している。そして、子どもたちの学び合いの土台となる表現力については、1) 自分の思いや考えを「伝える力」、2) 友達の思いや考えを「聞く力」、そして 3) 課題解決に向け、「話し合う力」に分割され、それらはさらに、低中高学年の 3 段階で詳細化されている。

さらに、研究の視点として、1) 探究心が持続する単元構成、2) かかわりの中で互いに高め合える場の構成が用意されている。前者は、①探究意欲をもち続けることのできる課題設定、②学び合う必要感のある教材化、③問題解決的な学習の実践という要素からなる。後者については、①見取りの充実、②交流の工夫、③焦点化するかかわりという下位視点が準備されている。

給食費、教材費の未納もなく、持ち家率は 95%以上であるが、経済的に特別に豊かであるというわけではない。

平成 17 年度に、市レベルの生活科・総合的な学習教育研究大会を催している。平成 19 年度から、「学校・地域連携事業」委託校となる。平成 21 年度に、創立 110 周年記念教育実践発表会を催している。この学校は、平成 26 年度の全国学力・学習状況調査において、国語・算数の AB 問題を総合すると全国的にみても、好成績を示している。

### 2 授業づくりの特徴

学校訪問時に、まずは、6 年生の国語の授業を見学した。文学的な文章の「海のいのち」の読解の授業であった。前時の振り返りを子どもたちがノートの叙述を見て行うことから授業はスタートした。授業者は、前時までの読解の疑問点をピックアップさせ、学習課題を自覚させていた。それは、クエを殺さなかった主人公に共感できるかどうかというものであり、「自身の共感度の度合いを『共感メーター』

(0%~100%)に位置づけよう」というものであった。

続いて、全員が起立して、全文を一人読みした。終わったものから着席したが、かなりの個人差があった。指導者は、その間ずっと、一人ひとりの子どもの音読に接近し、きめ細かく指導していた。

その後、子どもたちは、共感度とその理由をノートに記した。続いて、黒板に授業者が描いたメーター上に、ネームプレートを用いて、各自の共感度を示した。

授業者は、全員がネームプレートを黒板に貼った後、同じ共感度の子ども同士でその理由を交流するよう、指示した。子どもたちは、教室内を歩き回ってパートナーを見つけ、自由に意見を交換していた。

授業開始後 20 分強たったとき、授業者は、クラス全体での意見交換の場面を導入した。子どもたちは、思い思いに共感度とその理由を述べていたが、時折、授業者が、指名をして一部の子どもに発言を促していた。また、「何のために、『海のいのち』を学んでいるのか」と子どもたちに問うて、この題材で「生き方」を学ぶのだという視点を子どもたちに再度自覚させ、それを読解の助けとしていた。

授業開始後 30 分少したったときに、授業者は、ある児童のノートの叙述を参照しながら、次なる学習課題を示した。それは、「太一は、人とのかかわりによって、どのように成長したのだろうか」というものであった。子どもたちは、それに対する自身の考えを教科書本文やノートの叙述を便りにしながら記していた。そうした一人学びを授業者はきめ細かく支援していた。その後、数名の子どもたちが自身の考えを発言し、授業者がそれらの要点を板書したところで、授業は終わった。

授業後、授業者に当該授業について自評してもらったところ、「他の子どもに話しかけることで、困っている子どもに聞こえるように（何かの手がかりとなるよう）声かけを行っている場合もある」「子ども間の交流時間を設定するのは、全体では、全員の考えを取り上げることはできないことに対する対処である、それぞれの子どもの考えが強化されることを期待している」といった、思考力等の育成に関する手だてについてよく語った。

次いで、5年生の算数の授業を見学した。授業者は、子どもたちに、「割合を表すグラフ」の種類をたずねたが、彼らはノートを参照して、その問いに解答していた。続いて、授業者は、棒グラフ、折れ線グラフ、帯グラフ、円グラフを2つのグループに分類できないかと問うて、復習を重ねた。

その後、教科書の問題文「また食べたい給食のアンケート」の結果データを確認し、それを、帯グラフや円グラフに表すよう、指示した。次いで、同じデータの中から、5年生の回答だけを用いて円グラフ等を作成するよう指示した。

円グラフや帯グラフの作成において、項目を、全体のデータ量の多い順に並べるべきか、それとも5年生のデータ量の順に基づくべきかについて、子どもたちの意見が分かれ、それについての共通理解に至らないまま、授業は時間切れとなった。

全体を通して、子どもたちが学習問題に関する気づきを自由につぶやくなど、よい雰囲気での授業が進められていた。授業者に当該授業について振り返ってもらったところ、「なるべく全員に話してもらおう（学習参加させる）こと、子どもを主役にしていくことを心がけている」「授業では、これまでの復習とグラフを書くときに大切なことを取り上げてきた」「別の教科の要素（例えば、社会のグラフ）からアプローチしていくということも考えられる」といった、思考力・判断力・表現力の育成に関わるコメント

が続いた。

また、授業の際に、子どもたちが自主的にノートを振り返っている様子がみられたとこちらが指摘すると、授業者は、『(学んだことを) 忘れてしまうこともあるから、ノートをきちんととっていこう』と子どもたちを指導している」と語った。

### 3 特色ある取組

当校では、全校体制で、学び合いのための話し合いのルールを設定し、それを掲示物にして示している。

また、家庭学習の充実に向けて、各教室の掲示板において、家庭学習ノートの好例が紹介されていた。昨年度の5年生は、「家庭学習コンテスト」を行っていた。あるいは現在の3年生には、家庭学習ノートによる自主的な学びを推奨しているようだ。

当校は、校内研修の企画・運営が充実している。それは、次のような取り組みに代表される。

・10月に教育実践研究会が催されている。全クラスの国語の授業を2時間にわたって公開し、低中高特支の4ブロックで分科会も催している。例えば、6年生は、図工との関連のある研究授業を実施した。研究発表会にむけた取り組みとして、7月に事前研、夏休みにも研修を行った。

・研究の視点については、年度を通して、子どもの実態に応じて、修正しながら取り組んでいる。  
・学校独自に民間の学力テスト(国数)も実施しており、それについては、全校的な分析を行っている。全国学力・学習状況調査についての結果は、全校に広めている。

・学校長は、教員が他校の研究発表会に参加し、授業を参観することを推奨している。

なお、この地域ではすべての学校は、学力調査の結果を分析し、それを高めるための「学ぶ力」育成プログラムを作成しなければならない。この学校でも、学力調査の結果分析とともに、当該プログラムを作成し、学校ホームページで公開している。

### 4 総括的考察

当校では、研究テーマに基づき、学び合いを重視した授業づくりが大切にされている。また、子どもの意見やつぶやきを教員が拾い上げ、それをもとに、授業を即興的に修正して、展開している。そして、校内研修の充実によって、そうした理想的な授業像を教職員が共通理解し、一貫して行えるよう、組織化されている。

さらに、そうした授業像が、この学校の6年生の場合は、「徹底」されることとなった。なぜならば、当該学年は単学級であり、同時に学級担任が持ち上がりになったため、その学級担任の指導が2年間継続したからだ。例えば、当該教員は、国語科の文学作品の鑑賞(読解)において、先述した「共感メーカー」による意見交換(学び合いのための可視化、多様化、共有化の術)を2年間繰り返していた。同じ子どもたちに対して、思考力・判断力・表現力の育成に資する、学び合いに基づく学習が蓄積されるという意味の「徹底」が、この小学校の第6学年の学力調査の好成績の要因、あるいは少なくともその1つであると思われた。

## (6) F 市立 F 小学校

### 1 学校の概要

当校の教職員数は 37 名、児童数は 409 名（15 学級）である。校区の大半は大学のキャンパスが占める。大型ビル化の波を受け、一般住宅は減っているが、昔から親子何代にもわたって住んでいる方々もいる（下町的な様子も残っている）。家庭は安定しており、私立中学校を 4 分の 1 の児童が受験する。外国籍児童も在籍している（10 人、それゆえ、日本語指導教員が加配されている）。

当校の教育目標は、「明るく、ねばり強く、たくましい子どもになろう」である。また、学校経営の重点は、「子どもの『自信・勇気・知恵』を生きる力に変えて～想像力と創造力を子どもとともに高める～」である。

これに即して、同校の研究主題は、「知識から『知恵』へ高めていく子どもの育成～個を磨く学び合いが生まれる授業～」と定められている。ちなみに、平成 21 年度から 24 年度は、副題の「個を磨く学び合いが生まれる授業」が研究主題であった。それによって学び合いの成立は確認できたが、それを通した子どもの変容についての吟味が足らなかったという反省の下、平成 26 年度から、研究主題を上述のようなものにしたそうである。

なお、学び合いについては、「個を磨く」という点を重視し、それを、①これまでに獲得した知識や経験から追求した自分の考えをさらに深める学び合い、②新たな見方や考え方を獲得する学び合いと性格づけている。

さらに、これらの研究主題・副主題に迫るための視点として、視点 1「対象を自分に引き付けて考え、学ぶ楽しさを実感する単元構成」、視点 2「学びを加速させ、知を再構成する学習展開」を定めている。

学校要覧に依れば、比較的早くから、コンピュータの教育利用に取り組んでいる。3 年に 1 回、「教育実践発表会」を催している。昨年度より、オープン教室の新しい校舎となった。

当校が位置する地域の教育委員会が求める書式に即して、同校は、学力調査の結果を分析し、それに基づく「学ぶ力」育成プログラムを策定している。

なお、この学校の全国学力・学習状況調査の結果は、平成 19 年度は芳しくなかった。平成 20 年度は好転したが、平成 21 年度はまた低迷するというように、浮き沈みがあった。しかし、平成 25 年度及び平成 26 年度はいずれも、全国的にみてよい結果を残している。

### 2 授業づくりの特徴

まず、5 年生の国語の授業を見学した。「私たちの図書館改造提案」の題材に関する学びを子どもたちが繰り返していた。これは、教科書教材であるが、授業者は、その趣旨を踏まえた、フェアの開催というプロジェクトを導入し、それに資する学習活動を導入していた。授業者は、まず、フェア例を写真で示し、そのイメージを再確認していた。そして、子どもたちがフェアに関する提案内容を吟味するために、ワークシートを用意していた。子どもたちは、それを用いて、学校図書館の問題点、それを改善する際のフェア開催の趣旨（どんな人に向けて、どんな本を）、それによる効果を検討していた。また、そ

れを考えるための資料として、5月から12月までの学年別貸出状況のデータが提示されていた。子どもたちは、小グループを組んで、フェア開催のプランニングに従事していた。なお、クラスで提案内容を精査し、選ばれたものが、実際にフェア開催の原案になると聞いた。

次いで、5年生の算数の授業を見学した。それは、「百分率とグラフ」の単元に位置づく授業であった。授業者は、お菓子のチョコレートとビスケットの割合を「黄金比率」として示し、それを他の長さのお菓子に適用する学習課題を導入していた。子どもたちは、思い思いの長さ（例えば50センチ）のお菓子を考案していたが、授業者は、同じ長さのものなのに、異なる配分になっている例をとりあげ、どれが正しいのか、それはどのように説明できるのかを子どもたちに考えさせていた。子どもたちは、ノートに自力解決のプロセスをしっかりと記し、それをもとに、クラス全体の練り合いの場面で発表を繰り返していた。

さらに、6年生の国語の授業を2クラスで見学した。いずれのクラスも、「海のいのち」という文学的文章の読解を進めていた。しかも、同じ場面であった。めあても同じもの（「母と太一の思いを読もう」）が示されていた。中心発問は、「太一、母にとっての海は？」というものである。どちらのクラスにおいても、子どもたちが本文を読んで考えたことを次々と発表し、それを授業者が整理して板書するという展開が続いた。ただし、板書の構造は、2クラスで全く違った。また、1組では、ノートに自分の考えを記すのは授業の終末部分に限られていたが、2組では、子どもたちは授業中ずっと（自発的に）ノートに気づきを残していた。

子どもたちは、自分の考えを見いだす際に、教科書本文の叙述に加えて、自身のノートや以前学習した題材文の叙述を参考にしていた。また、分からない言葉があると、自発的に辞書をひもといていた。授業者は、全体での意見交換が停滞した際には、グループでの話し合いを導入するといった手立てを講じていた。

見学した4つの授業には、いくつかの共通点があると思われた。まず、子どもたちの「つぶやき」や「うなずき」が多いことである。彼らは、教員や友人の言葉によく反応していた。また、そのタイミングや様式は異なっていたが、子どもたちは、自身の考えを（量的、質的に）豊かにノートやワークシートに記していた。6年1組のふりかえりの場面においては、10分ほどの時間に、150字から300字程度の文章を彼らは記していた。そして、その際には、様々な手がかりを活用していた（授業者がそれを直接・間接に支援していた）。

個人作業、グループ活動、クラス全体での意見交換のバランス、子どもの自律的な学習と教員の指導のバランスもよいと感じた。

### 3 特色ある取組

全校レベルの取組として、「おはようタイム」等の設定があげられよう。それは、昭和55年から現在まで20年以上も続いている。それ以外にも、体操タイム、音楽のひろば、読書タイム等が設定されている。さらに、保護者や地域の方々の支援の下、課外授業を実施し、子どもたちは、各種の地域行事にも積極的に参加している。これらは、いわゆる「学びの基礎力」の育成に位置づくものであるが、この学

校では、そうした教科学習を支えるスキルの獲得やその基盤となる体験を味わえるエクストラ・カリキュラムが充実している。

さらに、教員たちの校内研修が極めて充実している。まず、その組織が整っている。国語、社会、算数、理科、特別支援部会の「教科部会」と、低学年生活科、中学年総合、高学年総合の「ブロック部会」の2本の柱が設定されている。そのため、教員たちは、2種類の研究部会に所属し、学校全体や部会単位での授業研究を重ねることとなる。さらに、1学期に、ノート指導に関する研究会を実施している。それは、ノート指導の実践例の紹介に加えて、各教員がノートの事例を持ち寄り、「自分がノート指導で大切にしていること」を交流し合うものであった。なお、平成26年度から28年度の研究に関する中期計画も策定されているが、それによって、研究の重点や推移が可視化されていた。

学校経営と学級経営の連動を学校は強調した。すなわち、学校経営の重点10項目を学級経営案の様式にも適用して、学年をまたいで指導が一貫するようにしたそうである。それを強化するために、学年研修や学校長面談においても、学校経営の重点10項目の内容を話題にすると聞いた。

#### 4 総括的考察

家庭の経済状況等が比較的安定していることを追い風にして、教員たちは、「学び合い」を核とする思考力等の育成に努力を傾注している。また、その実践では、子どもたちが自身の思考を「書いて」表現する活動が量的・質的に充実している。それが、全国学力・学習状況調査の好成績をもたらしているのではないかと。

なお、その際に、教員たちが、指導の一貫性を保とうとしていること、それをシステムティックに展開していることは、注目に値する。とりわけ、学校経営と学級経営や学習指導の一体化が功を奏している。また、それを環境（オープン教室）や状況（研究熱心な地域性、校内研修の組織的展開）が支えている。

## (7) G 市立 G 小学校

### 1 学校の概要

平成 26 年度の全校児童は 96 名という小規模校である。教職員は、14 名（うち、教員は 12 名）である。学校長によれば、子どもたちの家庭は、落ち着いているところが多い（確認したが、富裕層ではない）。また、地域住民は、極めて学校教育に協力的である。例えば、96 名の児童の通学時に、70 名ほどの地域住民が見守りにあたってくださるという。そして、「〇〇〇〇コミュニティ」という地域教育協議会が設けられている。それは、「地域コミュニティ」と「共育コミュニティ」の 2 つのコミュニティから成り立ち、公民館と協働しながら目的に沿った事業を展開している。

この学校の教育目標は、「一人ひとりの良さや可能性を生かし、創造性に富み、豊かな人間性や社会性をそなえた子どもを育てる。～自分を広げ、可能性を高める～」である。また、平成 26 年度の研究主題は、「かかわり合いを通して、ともに高め合う子どもの育成—健やかな体づくりと学び合う授業づくり—」であった。

過去に、体力向上に関する実践研究を重ねてきた。教頭によれば、平成 23、24 年度に、地域の体力向上指定事業を委託されたが、それによって、教員たちが共同で学ぶ姿勢が生まれた。平成 25 年度より、いわゆる「学び合い」に関する研究を推進しているが、それは、教育学研究者の考え方に学びながら、「G 小学校の学び合い」として自校化しようとするものであった。平成 25 年度は国語科・算数科に研究対象教科を絞っているが、平成 26 年度は、教科を絞らずに研究を推進している。

毎年、全教員が研究授業を実施することになっている。教育実践集録を平成 10 年度から継続して刊行している。そこには、教育実践の全体像、教科学習の実践、教科外の取り組み、そして資料が掲載されている。教科学習の実践には、各教員の研究授業等とそれに対する成果と課題が示されている。

この学校の子どもたちは、平成 26 年度の全国学力・学習状況調査において、全国的に見ても、よい結果をあげた。それは、国語・算数のいずれの教科においても、また問題 A でも問題 B でも、そうであった。

### 2 授業づくりの特徴

訪問時に、第 5 学年と第 6 学年の算数の授業を見学した。いずれの教室においても、授業の開始時に、学習のめあてに加えて、1 時間の学習の流れが詳しく掲示され、教員と子ども間でそれらがいてねいに確認された。その後、子どもたちが、個人で、ペアで、3～4 人のグループで、そして、クラス全体で問題解決にあたるという、多面的な問題解決学習が展開された。

その問題は、いずれも、文章題であった。例えば、第 5 学年の場合は、「もとにする量＝比べる量÷割合」という原理に基づき、人数等を求めるものであった。また、第 6 学年の場合は、教科書の「よみとる算数」というページに載っている、複雑な要素から成る文章題を読解し、答えを導き出すものであった。子どもたちは、家庭学習においてそれに取り組み、自分なりの解答をノートに記して、当該授業に備えていた。

グループによる問題解決学習においても、両クラスともに、子どもたちが夢中になって、それに従事していた。子どもたちは、思わず乗り出したり、立ち上がったたりして、協同的に問題解決にあたっていた。

各グループが自分たちの思考を小黒板に図やテキストを用いて記し、それらを比較検討することで、クラス全体の共同思考が展開されていた。各グループの思考が発表されている間、それを残る子どもたちが真摯な姿勢で聞いていた。子どもが、友人の発表内容について、素朴に質問を投げかけたり、厳しい意見を呈したりする姿も確認された。特筆すべきは、発表内容に関する意見等がつぶやきの形で表明されていたことである。授業者も、子どもたちの発表の不明確な点や間違いについては、即時的に修正をし、それらを見逃さなかった。

第5学年の授業においては、確認テストが実施されたが、その採点は、子どもたちが教員用指導書を利用して自分たちで行っていた。また、確認テストの問題は複数のものが用意され、子どもたちは、次々とそれらにチャレンジしていた。加えて、そのようなプロセスが掲示によってあらためて確認されていた。

第6学年の子どもたちは、家庭学習ノートを手にしてしていた。その表紙には、家庭学習の手引きが貼られていた。

どちらの教室においても、全体を通じて、子どもたちがよく書き、よく話すという言語活動の充実の側面が色濃かった。しかも、それがスピーディーに繰り広げられていた。

### 3 特色ある取組

この学校では、2週間に1回、異学年の「学び合い」の時間を設定している。学年の設定については、例えば2年生と3年生が合同で学んだ後であれば、次の異学年「学び合い」の機会には3年生は4年生と合同で学ぶという流れが計画され、実施されていた。

先述したように、この学校では全校体制で、体力向上に取り組んでいる。例えば、県教育委員会が主催している、縄跳び等のチャレンジコンテストに参加し、優秀な成績を得ている。

この学校の教員たちは、全国学力・学習状況調査の結果を分析して、学校として課題となっている点を明らかにしている。加えて、平成24年12月に、国語と算数の基礎基本に関わる問題のテストを作成し、翌年以降それを年2回実施して、個々の子どもの解答、その正誤がどのように変遷するかを、縦断的に分析している点は注目に値しよう。

研究主題を中心に、全体研究会として、低中高学年の3授業、特別支援教育2授業による授業研究会が企画・運営されている。それらのための指導案検討会も実施されている。また、部会研究会として低中高学年の4授業に関する授業研究会が開催されている。

#### 4 総括的考察

見学した授業からすれば、授業における学び合いをこの学校は地道に実践し、自分たちのものになっている。インタビューにおいて、研究主任が、それを実践していることが他の教員たちのモデルになっていると聞いた。

同時に、学び合いにおいて、「書くこと」が重視されている。子どもたちは、自身の考えをノートに、小黒板に、一生懸命綴っていた。

そして、学び合い等を重視した授業の成立に資すると思われるものが、子どもの学力実態のていねいな把握である。全員で100名を下回る人数であるから、確認テストの結果を全児童分、教員たちは把握できる。それを共通の「教材」にして、教員たちの学び合いも成立しているようだ。小規模校ならではのアプローチであろう。

なお、研究者が説く「学び合い」に縛られず、そのスタイルを自校化する、それを発展させる（異学年学び合い等）といった、教員たちの「学び」を大切にする姿勢も、学力調査で好結果を残す要因ではないかと推察する。

## (8) H 市立 H 小学校

### 1 概要

当校は非常にのどかな地域にある小学校である。昔は三世同居が多かったが、現在は核家族化も進んでいる。学校の統廃合を繰り返して、学区は非常に広く、徒歩で通ってくる児童とスクールバスで通ってくる児童がいる。一番遠くてバスで 30 分程度。学校規模もそれほど大きくなく、各学年一学級であり、各学年 10 人～20 人程度である。

家庭は、公務員、サラリーマンが殆どで、自営業で商いをしている家庭や漁業・農業・林業の家庭は若干数である。以前は県の教員を多く輩出していた地域である。

### 2 学力水準

21 年度以前は県平均を下回る学力水準だったものが、25 年度、26 年度ともに高い学力水準にまで改善してきている。各学年、学力に課題のある児童もいるが、おおむね、各学年、安定した学力は有しているという認識を教員は持っている。

### 3 全校レベルでの特色ある取り組み

特別なことはしていない。年数回の全校テストやノート検定を行ったりして、地道な学習への取組を行っている。当たり前のことを当たり前に行うようにしている。

また、知識構成型ジグソー法を導入しており、授業の中でジグソー法を用いた授業設計を行っているところが、本校の大きな特徴であるといえる。

### 4 教科指導

可能な教科でジグソー法を導入して、話し合いに基づいた授業を展開している（写真 1～写真 4）。

また、全ての教科において、個々の教員の授業スタイルを共有し授業を行っている。そのため、子どもたちは、どの教員と学習しても授業の展開の見通しをもちながら落ち着いて学習ができるようになっている。基本的には授業を、【つかむ】→【考える】→【深める】→【まとめる（広げる）】という展開で実践している（写真 5、6）。校内研もあるが、それ以外の職員室での日常の会話でも研究の話や教育の話がよく行われている。また、日常的に他の教員の授業を見る「ちょこっと参観」をしようと声をかけ合ったり、指導主事訪問等で一斉に研究授業を行った時などは板書を残しておいて、みんなで「板書ツアー」と題して板書を見に行ったりして、学習の流れや板書の仕方について今後の自分の指導に生かすようにしている。

### 5 児童指導

児童指導に関しても、当校の「生活スタンダード」を作成して臨んでいる。生活態度や学習態度に関しても、先生たちが別々のことを言ってしまうと子どもが混乱する。出来るだけ、先生たちの意識を統

一させたいという思いから、「生活スタンダード」に基づいた指導の徹底を図っている。また、教員一丸となって子どもたちへの働きかけを行っている。

指導力のある教員（研究主任等）を4年生に配置して、低学年と高学年への橋渡しをしっかりとした丁寧な子どもへのフォローを通して行っている。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

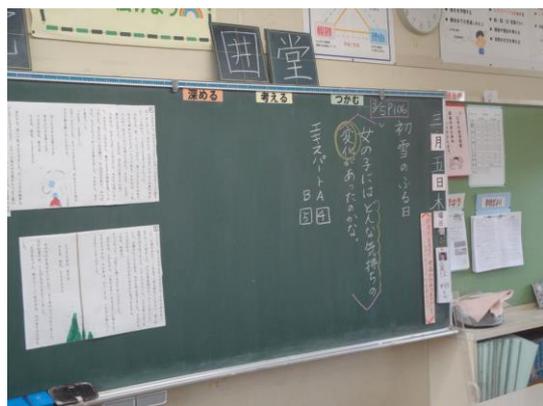


写真6

## 6 家庭学習の在り方・保護者連携

低学年・中学年・高学年の家庭学習時間を決めて、宿題と自主学習ノートを使つての学習を行うよう

に推奨している。自主学習では、子どもたちが取り組みやすいようにメニューを決めている（写真7、8）。基本的には、授業の補足的となるものを宿題では出している。自主学習では、各自の進度に合わせた応用的な内容をするようにしている。9割9分の子どもたちがやってくる。

また、月に一度、家庭学習振り返り週間を設けて、生活面等の1週間の取組を調査している。また保護者にもチェックしてもらい感想を書いてもらうようにしている。この振り返りから教員も子ども自身も勉強や生活に対して偏りがあるかどうか分かるようなチェックシートになっている。同時に、子どもたち自身のモチベーションにもつながるような配慮を行っている。

保護者の家庭学習に関する関心度は学年が上がるにつれて下がってくる傾向にあるので、家庭学習の手引きを作成し、児童にも保護者にも参考になるようにしている。



写真7



写真8

## 7 地域との連携

地区にある2つの小学校から1つの中学校に入学していくので、2つの小学校の6年生は卒業した春休みに、公民館主催で中学校へ向けての学習会を行っている。学習会には、地域の元教員や6年担任が主に算数と英語の指導にあたっている。

また、地域の4つの公民館では振替休日や夏休みに様々な行事を計画して、地域との関わりを持たせる機会を作ってくれている。

ゲストティーチャーとして多くの方々が協力してくださる。特に、地域学習や道徳のゲストティーチャー、外国語活動にも地域の先生方がきてくださっている。また、児童安全育成委員会を組織していて、100名程度の方々がボランティアで登録していて、登下校の児童の見守りを行っている。

## 8 小中連携

地域の特徴として、保育所一つ、小学校二校、中学校一校、高校一校であるため、小学校の卒業生の大部分は、そのまま高校までエスカレーターで進学する、ほぼ高校までの一貫校である。このような特徴があるため、幼保小中高連携協議会を設けていて、子どもたちの状況や取組を報告し合っている。また、研究授業を行ってそれぞれの授業交流も行っている。

キャリア教育の一環として、高校生にゲストティーチャーとして来校してもらい、勉強に対する思いなどを6年生に話してもらった。6年生は先輩から学ぶ話を真剣な表情で聞いていた。

### 9 低学力層の底上げ、無解答の減少

昼休み、放課後、「ぐんぐんタイム」を設けて、級外の先生や管理職の先生の協力を得て、個に応じた指導を行っている。また、月ごとの補充学習計画を全学年、各担任が作って計画的に行っている。

算数に関しては、体育専科の教員が配置されていた3年間、4・5・6年生において習熟度別少人数学習を行っていた。同一授業の中で、ぐんぐんコースとこつこつコースに分けて行った。当該教員は5、6年の体育を主に担当しているため、その教員の持ち時間の中に4・5・6年の算数の時間を組み込むことで習熟度別学習を行った。もともと少ない人数の中で、習熟度別に2グループに分けて授業を行えているところに非常に大きな特徴があるといえる。

### 10 児童生徒の意欲・関心の向上

校内の様々なところに、全国学力・学習状況調査や各種テストにおいて難しかった問題を掲示して、クイズ方式で横に回答箱を用意して、学年に関係なく子どもたちが回答できるようにしている（正解しても特別なことがあるわけではない）（写真9～11）。また、特別室などに様々な知育玩具や教育資料が展示されており、子どもたちが、教育内容に興味を示す仕掛けを多く用意していた（写真12）。

また、廊下に各学年のその日に出された自主学习ノートが展示されており、子どもたちが自由にそれを見ることができるようになっている。どのように学習したらよいか分からない子がよくやっている子のノートを見て参考にし、自主学习へのモチベーションにつながるように展示している（写真8）。



写真9

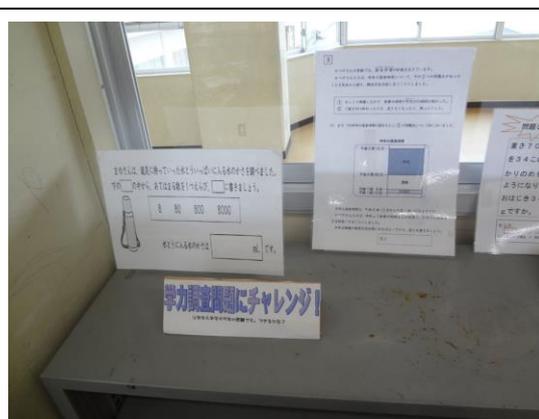


写真10



## 11 教員研修

教員は必ず年2回の公開授業を行っている。1回は指導主事計画訪問ともう1回は校内研で指導主事を要請して指導を受けている。授業研究にあたって、指導案検討会、教員での模擬授業、研究授業、授業整理会を行って研修している。校内研は基本的には全教員で行うが、テーマを設けるときには低学年部会と高学年部会に分けて行っている。

## 12 その他の特色ある取り組み

(現) 学校長が、赴任した当時は個々の教員の授業スタイルは共通性の少ないものであった。また、黒板に学習課題やまとめが書いてある授業とない授業等があった。そのため、ノートを見ても、課題が書かれているノートと書かれていないノートがあるなど統一感が感じられない状態だった。また、児童の生活指導に関しても、教員によって指導の基準にばらつきが見られた。そのため、本校の「生活スタンダード」を作成し指導の統一を図り、児童の生活指導や授業に関しての指導で基本的な考え方を徹底させた。このことにより「生活スタンダード」で共通の指導ができるようになったので児童も教員によって対応が違うという迷いがなくなった。また、新しい年度になり転任してきた教員もそれを一読することで児童の指導に生かすことができている。

## 13 総括的考察

当校の大きな特徴は、教員組織にあるといえる。13 教員中 11 名が女性であり、学校長、教頭、教務主任、研究主任、生徒指導、管理職はすべて女性である。また、学校長は自校昇任であったため、学校の実態がよく分かる状況であった。そのため、教頭や各主任層との連携もスムーズに行われており、学校長から管理職、各教員への意思疎通もしっかりなされているように感じた。

もう一つの特徴として、児童の指導、授業それぞれに関して、スタンダードを用いた全教員同一の指導の徹底を行う事で、どの子どもたちに対してどの教員が接しても同じ対応になるように心掛けていることが見て取れた。そのような取り組みが結果として、非常に良い学校運営になっているといえる。

## (9) I 町立 I 小学校

当校は、学力に課題のある道府県において選定された学校ではなく、全国的にみて近年大変優れた学力向上の成果をあげている小学校の1校として選定した学校である。

当校は、国語科の研究に長年取り組んできたものの、読解力に課題を抱えていた。そこで子どもの読解力を高め学んだことを伝える力を育成しようと、図書館教育に学校全体で取り組んできた。その功績が認められ、全国レベルでの教育賞を受賞した。当校の学力実態はここ数年全国でもトップレベルを誇っている。

1学年1学級という少人数かつ小規模校であるが、発達障害傾向で支援を要する児童が多く、文部科学省調査の6.5%を超えている。しかし当校では、統一した計画に基づき一人ひとりのニーズに合った教育を展開することで、県内だけでなく全国でトップレベルの学力を示す学校となっている。

### 1 授業参観を通じた授業の特色

授業参観全体を通して印象的であったのは次の3点である。

まず、本時のねらいが明確に示されていることである。ねらいを赤い枠で囲むよう全クラスで統一している。次に、授業規律がしっかりとしていることである。発表する側も発表を聞く側も発言のマナーと規律がしっかりしており、発表しやすい雰囲気を作られている。最後に、学んだことを相手に伝えることを重視していることである。本時のねらいを達成するための発表であることが明確になっている。

これらの指導上のポイントに関わって、具体的には授業中の規律の徹底のために、例えば「足ピタ」や「しせい」を子どもたち自らが意識化して自覚的に取り組めるような掲示の工夫をしている(写真1)。また、子ども同士のコミュニケーションを活性化するために話型とともにハンドサインを掲示したり(写真2)、ふわふわ言葉を使うように促したりしている(写真3)。学校生活全体の規律維持に関わっては、教室内の整理整頓が第一に大切であるが、当校ではどの教室でもランドセルがきれいに棚に置いてあり、子どもたちの整理習慣がしっかりと根付いている様子が伺えた(写真4)。

さらに、「ひびき合い名人表」という授業で使える話型と言語技を可視化して掲示し、わかりやすい発表や話し合いができるよう工夫している(写真5)。最後に、クラス内で認め合いのある授業が成立するように、友だちのよいところをカードに書いて掲示するコーナーをどの教室にも設置している(写真6)。

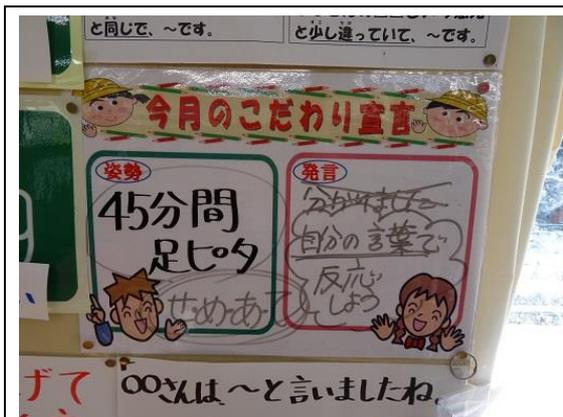


写真1 今月のこだわり宣言「足ピタ」



写真2 話型を付けたハンドサインの掲示

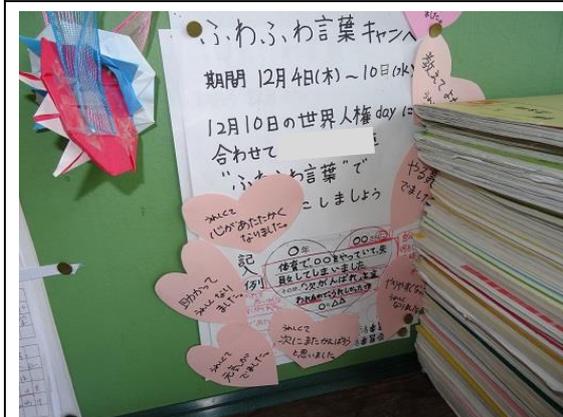


写真3 ふわふわ言葉キャンペーン



写真4 きれいに整理整頓されている



写真5 話し・聞き・話し合い名人の技



写真6 友だちのほめほめカードの掲示

## 2 年間計画に基づく全校一体の図書館教育・読書活動の取組

当校の図書館教育は、図書室の整備から、貸出システムのコンピュータ化、読書運動の推進、そして教科学習での図書利用に至る、実に多様で効果的な取組を全校体制で積極的に推進している。いくつもの教育賞を受賞していることも当然であるとうなずける（写真7・8）。



写真7 コンピュータ貸し出しシステム



写真8 図書館祭りの校内掲示

まず、担任によってばらつきが出ないようにするため、ある程度の全校レベルでの指導基準を示して図書館教育の年間計画を各学年で立てている。低学年は読書の「すりこみ期」、中学年は絵本からさらに字数の多い本への「移行期」、高学年は文学への入り口の「チャレンジ期」としている。

次に、並行読書の取組が大変充実している。例えば、並行読書のためのリストを作成したり、図書館に単元ごとに関連する図書を集めた並行読書専用の棚を設置したりしている（写真9・10）。



写真9 学年別の並行読書リスト



写真10 学年別の並行読書用本棚

並行読書については、どの教室にも並行読書で読んでほしい図書をコーナーにして開架している。国語科のみなならず、平成25年度からは国語科以外でも生活科や家庭科、社会科などで並行読書が充実している。このことが、読む力だけでなく、要約したり感想を書いたりすることを通して考えて書く力が育っている。

並行読書においては、少人数クラスのよさを生かして、一人一人が利用している図書が異なっていることが特色である。自分が読みたい本やわかりやすい本を選べるのが、子どもたちの学習意欲を高めているという（写真11）。また、並行読書が充実することによって、例えば理科などの「調べて考えて発表する」タイプの授業において、いわゆるPISA型読解力や活用型学力を育てることを可能とする多様な資料活用による学習が行えるようになってきている。参観させていただいた6年生の理科の授業では、地層と地震をテーマとして、図書館で学習を行っていた。そこでは子どもたちが、教科書だけでなく、

理科の資料集や理科事典、小学生新聞などを組み合わせて活用して、調べて分かったことや考えたことをわかりやすくノートに整理して書いていた（写真12・13）。



写真11 自分で本を選べる環境整備



写真12 図書館での理科の調べ学習



写真13 多様な資料を組み合わせる



写真14 お薦めの本を紹介するコーナー

さらに、全校読書・集団読書を活性化するために、「全校読書の日」を毎週木曜日の朝に実施したり、前日机の上に本を用意して帰るようにしたりしている。平成24年度からは、「集団読書の日」を、水曜日の朝、月に1～2回実施し、同じ本を読んで意見の交流を図っている。また、読後に感想文を書いて交流を行う取組も行っている（写真14）。

読書の質を高めるために、毎学期、読書カルテを書かせるとともに、それを用いて学級担任と読書相談を定期的に行っている。子どもたちは、自分の読書を振り返ることができ、一方学級担任は読書相談をすることで良書を選んで子どもの読書の幅を広げるように指導している。

また、入学時に一人一冊ファイルを配布し、それを読書ファイルとして活用させ、子どもたちが自分の読書の記録を蓄積できるようにしている。それと関連して、教室にはがきサイズの読書カードを差し込んでおくポケット式の掲示コーナーがある。こうした一人一人がつけている読書に関する資料を保存し、卒業時には宝物となるようにしている。

こうした豊かな図書館教育と読書活動の推進は全教員が担当している。例えば、学級担任による読み聞かせを行ったり、教員のおすすめ本を校内に設置したり、図書の廃棄や図書館の整備までもすべて行っている。

### 3 家庭学習の在り方・保護者連携

当校の家庭学習は、まず秋田県の家庭学習を参考にした自主学习ノートが担っている。自主学习ノートには、毎日見開き2ページに自分で学びたいことを勉強してくるようにしている(写真15・16)。



写真15 積み上げられた自主学习ノート

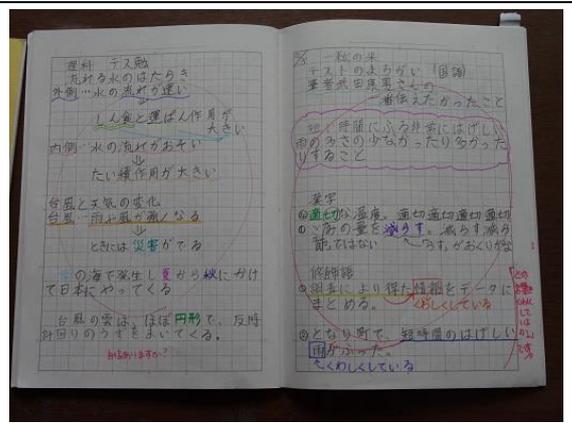


写真16 整理して書いているノート

次に、PTAの協力による家族読書の推進や、母親委員会の呼びかけによるノーテレビデーとノーゲームデーの取組を行っている。また、読書活動との関わりでは、保護者と地域住民による読み聞かせを実施し、平成26年度の保護者の参加は90%以上であったという。日曜参観では、父親による読み聞かせも行っている。

このようにして、当校では豊かな家庭学習が成立するように様々な取組を実施している。

### 4 地域との連携

地域の協力も多様に得られている。例えば、地域住民の手作りの書架や個人賞メダルづくり、地域の図書館司書との連携をしている。

### 5 保小連携

保小連携については、読み聞かせ等による交流を行ったり、保小での児童に関する情報交換・共有を行ったりしている。

### 6 低学力層の底上げ・無解答の減少

まず、児童全てが、学習が分かり楽しいと感じられるよう、UD(ユニバーサル・デザイン)や個に応じた支援のあり方を工夫している。すでに言及したように、当校は特別な支援を要する児童が多いため、学校長や教頭、教務主任を含めた全校体制で特別な支援を要する児童を支えている。

具体的には、少人数学級の中でさらに習熟度別指導を導入し、じっくりコースとチャレンジコースを設定した算数科指導を行っている。また、全校児童67名に対し3名の特別支援教育のための支援員が配置されているので、豊かなTT指導が行えるよう条件整備も充実している。宿題については、「全員に満点を」という標語を元に児童ができる自信がついた状態を出すように教員全体が心がけているという。

最後に、活用型学力の育成と学力調査における無答率の減少のために、全国的な学力調査のこれまでの問題Bを解かせて、考えて書くことに抵抗感を持たないように工夫している。考えて書くことと関連しては、どの子にも書く力をつけるため、当校では定期的に新聞の記事を一つ選んで、内容の要約をしたり自分の考えを述べたりしている（写真 17）。また、毎週の日記指導の中で新しい語彙を使いながら考えて書く力を育てている。

## 7 児童の意欲・関心の向上

最後に、子どもたちの学習意欲の向上のために、次のような特色ある取組を行っている。

一つには、ICT 利用である。図書館教育を積極的に進めながら、その一方でデジタル機器の活用にも積極的に取り組んでいる。特に、大型液晶テレビが図書館と全教室に設置されていて、視聴覚教材の提示や子どもたちの発表活動でよく使われている（写真 18）。

二つには、学校長による子ども表彰「よさや得意をのばす名人賞」である。地域の名産品である木を使って地域の人に作ってもらった円形の板に、学校長がほめほめ言葉を書いて各教室や校長室前の廊下に定期的に掲示して表彰している。賞の種類は、「あいさつ」「歌」「百人一首」「自主学习」「責任感」「歌の表情」「努力」などと多様であり、すべての子を多面的に見て肯定的に評価することを通して、一人一人の子どもの自尊感情を高め、何事にも意欲的に取り組めるように工夫している（写真 19）。

さらに、すべての子どもに、学期毎に「〇学期のめあて」を書かせて掲示している（写真 20）。もちろんこの取組自体は新しいものではないが、書いている観点の豊かさと決意の強さにあふれた自己宣言になっているところが素晴らしい。子どもたちの学習や生活に臨む姿勢の高さを感じることができた。



写真 17 内容要約力をつける新聞づくり



写真 18 教室に設置された ICT 機器の活用



写真 19 児童全員がもらえる校長表彰

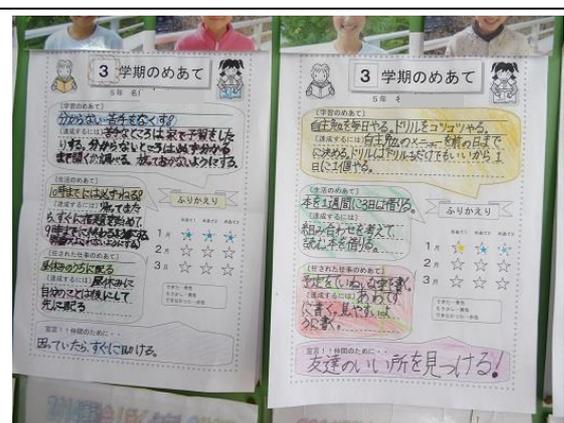


写真 20 学期のめあても具体的に書く

最後に紹介したいのは、授業における「問い合い」の場面の設定である。3人一組になり、その時間に学んだことを Q&A 形式で問い合うのである。答えがわかっているものでも構わないそうである。大切なことは、楽しいクイズ合戦のようにしながら、授業で学んだことについて問い合うことで、学習内容の定着を図るとともに、友だち同士で協力して教え合うことで、協力する力やコミュニケーション活動の自信を高めようとしている。

## 8 総括的考察

以上のような実に多様な取組を複合的に実施することで、当校は、全国学力・学習状況調査の結果において全国でもトップレベルを誇っている。しかもそれを、この3年程度で劇的なスピードで実現してきた。

また当校では、学校長のリーダーシップの元、教職員が一丸となって日々の教育活動に取り組んでいる。特色としては、図書館教育を重視している学校であり、担任との読書相談や、単元を貫く「並行読書」、本の紹介活動などを通し豊かな自己表現を行う児童の育成を行っている。児童は学習意欲が高く授業にも積極的に取り組んでいるが、発達障害傾向で支援を要する児童が多い中で、学校全体に良い学習環境がつけられているのは特筆すべき点である。教職員の UD を意識した授業づくりや日々の指導改善が落ち着いた学習環境づくりを可能にしている。

活用型の授業の実践についても積極的であり、特に国語科においては活用単元をもらさず実施し、例えばパンフレット作りやレポートづくりなどの長文を必要とする作品制作にも積極的に取り組んでいる。そしてその成果を図書館の入り口に設置した学習資料コーナーに保管し、下学年の児童が参考にできるようにしている。こうした教科書を基盤とした地道な書く活動の取組が、当校の問題Bの成果に明らかに表れているといえる。

加えて、外部との連携が強固である。家庭・地域と連携し、家庭学習習慣の確立や多様な教育活動を行っている。また保育園や中学校と連携し、一人ひとりの子どもの情報交換や移行支援にも積極的である。

さらに注目すべきことは、高い成果を挙げている当校においても、学校評価委員会を核にした評価計画の推進と結果の公表を行っており、R-PDCA サイクルによって月ごとに教育活動の改善を行って

る点である。こうした教職員のたゆまぬ努力が質の高い教育活動を生み出している。

また、年度末に行う学習発表会の教育効果について言及しておきたい。当校では、15年ほど前から地域の600人ほど収容できるホールを借りて、各学年でテーマを決めてそれまでの教科学習や総合的な学習の時間に学んだことから一つを選び、シナリオを新たに書き起こしてマイクを使わずに大きな声で発表するのだそうである。こうした大きな舞台発表を経験することで、発表に自信が付き笑顔でできるようになるらしい。当校の授業中の発表の声が大きく堂々としているのには、こうした伝統的な学校行事での地域に向けた発表活動があったのである。

当校は、小規模校であることから、教員の異動サイクルが短い中で、学級担任の力の影響が強いため、研究授業を通して全教員で協力して授業力や学級経営力の向上に真剣に取り組んでいる。

このように、学校長のリーダーシップの元、学校・保護者・地域・異校種の連携、日々の指導改善が児童の学力向上に大きな成果をもたらしていることがわかった。子どもたちの素直さと全教員の学力向上に取り組む誠実さが心に残る学校であった。

## (10) J 市立 J 小学校

### 1 概要

当校は、非常にのどかで安定した地域にある小学校であり、近郊は準農村地帯である。昔からのどかで安定した学校といわれ、生徒指導上の大きな問題はあまりなかった。しかし、市の宅地造成施策によって児童数も急増し、各学年少人数の単学級から2学級の学年構成となり、それまでの児童の人間関係にも変化が現れ始めた。学校が一時荒れ、平成19年前後にその状況が深刻になり、学力調査の結果も下位に低迷していた。しかしながら、その間も、学校一丸となって職員は課題を共有化しながら粘り強く生徒指導に取り組み、徐々に立て直しを行っていった。家庭環境が安定した家庭が多く、公務員も比較的多いという特徴がある。

### 2 学力水準

平成19年度に生徒指導上深刻な状況となり、授業の成立しない学級があった。学力も落ち込み、その時期は特に職員は学力への危機意識を高め、何とかして立て直す気風が高まった。職員は児童の側から離れる時間を無くすよう組織的に取り組んだ。3年前までは、朝遊びの時間を設けず、教員は教室で登校してきた子どもを出迎える習慣ができた。

平成19年度以降、職員の取組や家庭・地域の支援等により生徒指導上も落ち着き始めた。その後、子どもたちの学力を上げるように、研究組織を見直した。教育委員会が「単元指導パッケージ」を作成する際に研究協力校として指定を受け、一気に授業改善をしようという機運に学校がつつまれた。国語科と算数科を両輪に徹底的に授業研究を行った。授業づくりを大切にするため、組織には、研究推進部長、授業部長を置き、全体を国語グループと算数グループに分けて、国語部長、算数部長をそれぞれのグループに置いて研究を行った。研究においても、職員が一致団結していて、いつでも動いている。目標管理が非常にしっかりなされている。

学力調査の結果も、平成19年度、20年度は低い水準であったが、25年度、26年度には、全校を挙げて行った授業改善の成果が表れ、比較的高い水準にまで上げてきている。

### 3 全校レベルでの特色ある取り組み

学校・授業を参観して感じたこととして、大きく下記の2つが挙げられる。

一つにはグループワークをほとんどしないという特徴である。本来であれば、グループワークに適するような課題であっても、教員の指示は「隣の人との打ち合わせ」である。クラスの全員が「隣の席の児童」か「後ろ（前）の席の児童」とペアでの話し合いを行っていた（写真1、2）。これは、グループワークにしてしまうと、積極的に参加する児童と消極的に参加する児童に分かれてしまうこと、そして、机を移動すると「構え」てしまう子が出てきてしまう事を防ぐためであり、身体だけを向けることによって、意図的に「学び合い、聴き合い」の場をつくっているという特徴が挙げられる。

二つには、子どもたちの発言スタイルの自由さである。学校の日常場面（休み時間等）においても、

廊下等で大きな声で自由に話している子どもたちを教員が温かい目で見守っている。それは授業場面においても同様で、授業中の発言スタイルも非常に多様であった。自由に発言する児童もいれば、手を挙げて発言する児童もいる。自由に発言した児童に対しても、教員は全部、その内容をくみ取って授業進行に組み込んでいる。発言スタイルは自由であるが、授業内容から外れる発言をする児童はいなかった。訪問時の校長の「授業の中での自由な吹きは自由な発想の源泉である」という考えのもと、授業内の自由な発言を制限させない方針で授業運営を行っている（写真3、4）。



写真1



写真2



写真3



写真4

#### 4 教科指導

本日のめあてを、教員が黒板等にして子どもに伝えるのではなく、前時までの授業内容を復習した後、子どもたちにクイズ形式で「本日のめあて」を当てさせるという試みを行っていた。子どもたちも、前時の内容や先生のヒントをもとに当てようと「めあて」を考えることから授業が始まるという点が非常に特徴的であると感じた。

#### 5 家庭学習の在り方・保護者連携

家庭での学習の習慣づけはしっかりとできている。宿題量は非常に多い。かなり多くの児童がやって

くる。やってこない児童は、学校ですべて終わらせて帰るという習慣をしっかりと定着させている。基本的に宿題の内容は、その日に学習した内容であり、その日に習ったものはその日のうちにやっておくという方針のものに行っている。宿題に必ず付けるのがプリントで、学力調査や自治体独自のテストで課題があったものを中心に教員が独自に作ったものである。

宿題とは別に自主学習も行うように家庭に伝えている。自主学習については「家庭学習の手引き」を作成し、それを各家庭に配布している。特に、中学校のテスト週間（中間テスト、期末テスト）に合わせて、小学校も勉強しようと促している。その期間の勉強の目標時間を各クラスで決めて（600 時間とか 700 時間とか）、達成したらシートに花丸をつけるような取り組みを行っている。

保護者との連絡は、専用の連絡帳を用意しており、6 年生まで継続して行っている。保護者からの書き込みに関して担任がコメントを書いて返す。そこに音読カードも入れている。

## 6 地域との連携

地域で学校を応援する体制が非常に充実している。平成 16 年度に地域住民らによって発足した学校教育支援組織がある。全体で 50 人規模の組織であり、定期的に学校側との会議の場を設けている。学社連携の取り組みの一つであり、子どもの登下校の見回りだけでなく、子どもの勉強も支援している。ゲストティーチャーを呼ぶためのコーディネートをしたり、クラブ活動の顧問も全部、外部（地域）の人（ボランティア）が行ったりしており、その窓口も担当している。このように、学校の授業や特別活動の中に地域の人が普通に入ってくる体制づくりがしっかりなされている。

## 7 小中連携

小学校の学習の結果を中学校の入学時にしっかりとつなげるため、小4、中1で行う自治体独自のテストを分析し、中学校区で成果と課題の共有化を図っている。共通した課題を明らかにして、各校の授業改善に活かすように努めている。

## 8 低学力層の底上げ、無解答の減少

基礎学力定着のために、毎日スキルタイム 10 分をとっている（朝学習と掃除終了後）。また、特別支援員の先生が授業に入っている。TT というよりも個別の支援を行っている（特定の子どもに対してしっかりとフォローを行っている）。

学力定着に時間を要する児童に対しては、家庭に連絡したうえで放課後学習をさせている（週 1 回システムティックに行っている）。保護者と相談の上で決めている。さらに、保護者と相談の上で宿題内容や宿題の量の調整も行っている。加えて、補充学習として、掃除後の 10 分間、管理職や教務主任が「パワーアップ教室」という名目で個別学習を行い、学習意欲の向上を図っている。

## 9 児童の意欲・関心の向上を引き出すシステムづくり

安心して担任が指導に当たれるシステムが大事であるという考えの下に、組織的な支援体制の確立を

行っている。児童会議を立ち上げて、子どもに関する事（不登校、いじめ等）は全てそこで考える仕組みを構築した。子どもたちの学力の前提になる部分は担任だけで抱え込まず組織として対応するというシステムを作った。目的は情報の共有と人材育成であり、チームで考えるので色々な意見や考えが出る。そういう中で若い教員に、様々なスキルを引き継いでいく。このようなシステム構築の目的は、担任が積極的な学級経営を行えるようにすること、先生の努力を子どもたちの学力向上に注いでもらうということである。また、特別支援教育の視点からの会議として支援会議も招集している。この支援会議では、個別指導の進行管理や手立ての状況を把握している。特別支援学級の担任が特別支援教育コーディネーターとしてチーフになり会議の運営を行っている。

## 10 教員研修

全国規模の標準学力テスト（2、3、5年）を受けている。そこで課題のあった問題に関して PDCA のサイクルで検討を行っている。PDC までを夏の学力充実の研究会までに行い、そこからどう変化したかを冬の学力充実研究会で行う。この PDCA サイクルを全部、各学年の担任が自ら行うシステムを作っている。自学級の学力分析を担当が行うことによって、児童に自らが自分の課題を見つけて自分で克服する意欲を持たせることにつないでいる。この PDCA サイクルを各担任が行うことにより、授業改善に役立っていると考えられる。

校内研修が充実しており、職員会議のある週以外に月 3 回程度の研修を実施している。

授業評価に関しては、平成 24 年度からパフォーマンス評価を取り入れた。教員の中でも指導した限り評価は必ずやる必要があるという思いが非常に強くあり、研究を重ねて導入するようになった。授業研究会は月に 1 回は開かれていて、現在はパフォーマンス評価についてその方法や課題の設定、妥当性について研究を深めている。先生たちの授業研究への思いが強く、時間がおしても全員参加で行われる。授業公開も、各学級年に 2、3 回程度公開している。

## 11 その他特色のある取り組み

当校の特色ある取り組みとして、以下の二つが挙げられる。

一つは、漢字大会（学期 1 回）と計算大会（学期 2 回）である。定期的実施しており、保護者の理解も図られている。そのため、家庭学習で漢字練習や計算練習をする際にも保護者の励ましや支援を得られることもあり、子どもたちの動機づけも高くなり、子どものモチベーション維持に役立っていると考えられる。

二つには、非常に詳細な学力テストの分析を行っていることである。学力調査の詳細な分析はもちろんの事、自校出身者の中学 1 年生時の成績まで追跡し、中学 1 年生のどこでつまづいているのか、他小学校の卒業生と自校の卒業生を比較して、どのような問題に強くどのような問題が出来ないのかの分析を行い、各先生にフィードバックを行っている。

## 12 総括的考察

教育に関して、非常に大きな特徴を持った小学校といえる。訪問調査を行い、大きな転機が二つあったことが伺えた。

一つには、生徒指導上困難な状況からの V 字回復である。平成 18、19 年度をピークに生徒指導上困難だった学校を、教員一丸となって立ち直す機運が起きたことである。当時の教員の言葉を借りれば、「子どもに自分の学校への誇りを持たせるよう、職員が本当に一致団結していて、いつでも動いていた。」というような状況であった。そこで授業改善から学校改革まで大きな改革が一気に行われたことが挙げられる。その流れが現在まで残っており、非常に研究熱心で、教職員全体で授業研究を行うという文化がしっかりと根付いていると判断できる。

そして二つには、教育にしっかりと信念を持った校長の赴任である。校長が教育に対して持つ考えが各先生にも徹底されており、ルールに則った非常に自由で伸びやかな空気が学校の中に出来上がっていた。そのため、校内にいる子どもたちが、授業中であろうとそれ以外の時間であろうと非常に自由に感じた。また、校長が学校の抱えている問題点や現状の全体像をしっかりと見極めたうえで、適切な組織体制の構築を行い、それを実行している。また、一つ一つの教育的活動に対してしっかりと計画を立て、更にはそれに対しての目標を明確にしているという点が非常に印象的であった。そのような組織体制および教育活動の遂行が、学校の運営に非常によく作用していることがうかがえ、それが、子どもたちの学力向上にまでつながっていると考えることができる。